

〔資料紹介〕

白華文庫蔵・平野五岳「五岳道人 古竹邨舎詩鈔」について

川邊 雄大

はじめに

平野五岳「五岳道人 古竹邨舎詩鈔」（以下、本資料）は、石川県白山市立松任図書館・白華文庫^①に所蔵する松本白華^②旧蔵資料の一つで、幕末明治期に活躍した真宗僧、平野五岳の漢詩を鈔録したものである。

平野五岳は、文化六年（一八〇九）に豊後日田の正念寺に生まれた。名は岳・聞慧、字は五岳、別号に古竹園・方外仙史、竹邨方外史、古竹園主、古竹老衲などがある。のち、日田の専念寺に養子に入り、十一歳で咸宜園に入塾し広瀬淡窓に学んだ^③。そのため、大坂の広瀬旭莊^④（大坂咸宜園）で学んだ松本白華とは宗門を同じくするだけでなく、咸宜園の同門でもある。幕末期には、千原夕田（No.117「送夕田千原翁東遊」・村上佛山（No.131「悼村上佛山」）ら文人との交流を持ち、維新後は日田県知事として赴任した松方正義の知遇を得、当時東本願寺

の後楯となっていた大久保利通を介して、明治天皇へ書画が献上された。西南戦争直前に、西郷隆盛と密会しており、西郷の肖像を描いている。本資料にも、西郷をうたった詩（No.152「観西郷隆盛墳墓図有此作」）を収録する。明治二十六年（一八九三）、八十五歳で歿した。諡は玄通院。五岳の事績について述べたものに、小栗憲一『豊絵詩史』^⑤などがある。

五岳は、詩画をよくした。これまでに画集については、井原雲涯編『五岳上人神品』第一・二冊^⑦、五岳会編『五岳上人遺墨展』^⑧、緒方無元編『五岳上人遺墨撰集』^⑨、『平野五岳展図録 没後100年』^⑩、五岳顕彰会編『専念寺所蔵五岳上人遺墨遺品集』^⑪が刊行されている。詩集については、『五岳詩鈔』一卷（明治二十一年、以下『詩鈔』^⑫）・『統五岳詩鈔』一卷（以下、『統詩鈔』^⑬）・『古竹老衲詩集』（以下『詩集』^⑭）のほか、南條文雄著『南條先生遺芳』^⑮、五岳会編『五岳上人詩集 五岳上人遺墨集解説』^⑯、河内昭圓著『平野五岳詩選訳注』^⑰が刊行されてい

る。また、写本として『五岳詩集』¹⁸がある。

このほか、五三七人・のべ五三二九首の日本漢詩を収録した、兪樾編『東瀛詩選』(四十巻補遺四巻、明治十六年(一八八三)刊)巻三十九に二首(No.3「題楊妃洗祿兒図」、No.53「丁酉春日」)が採録されており、本資料もこの二首を収録している。

筆者は、本誌八号「『東瀛詩選』編纂に関する一考察―明治漢詩壇と日中関係との関わりを中心に―」において、先行研究や編纂に携わった北方心泉²⁰の自坊・常福寺(金沢市小將町)の関係資料などをもとに、『東瀛詩選』の編纂過程を明らかにするとともに、長三洲・中島子玉・平野五岳ら咸宜園出身者の漢詩の採録について指摘した。以下、平野五岳について述べた箇所を引用する。

平野五岳に關しても、「僧岳、字五岳、号竹邨、豊後人。

著有「古竹邨舍詩」一卷。以下二人(※心泉・五岳)皆有稿藏余処」とあり、五岳には「古竹邨舍詩」一卷があり、五岳と心泉については写本を使用したと述べている。五岳の詩集として、版本では『五岳詩鈔』一卷(明治二十一年)・『続五岳詩鈔』一卷があるものの、いずれも『詩選』に採録された「題楊妃洗祿兒図」・「丁酉春日」の二首を収録しておらず、刊行も『詩選』が刊行された後である。写本では、『古竹老

衲詩集』があり、いずれも両者を採録するものの、詩題から判断して『詩選』刊行以後、明治二十三年(一八九〇)以後に書かれたものである。白華文庫には、写本「古竹邨舍詩鈔」一卷が所蔵されており、『詩選』に採録された二首が収録され、詩題から判断しても明治十四年(一八八一)以前に書かれたものと推測され、本書が採録にあたって使用された可能性がある。

このように、詩集が未刊かつ咸宜園出身の三名(※長・中島・平野)の人物については、旧雨社同人たちも知らない写本が用いられており、彼等の採録に關しては、咸宜園の流れをくむ白華の所蔵する写本を利用した可能性が高いのである。

解題

本資料は、版心に「松本蔵」と印刷された十行の用箋に、合計一五五首に互る五岳の漢詩が収録されており、筆蹟から判断して松本白華が書写したものである(本稿末尾、写真①・②参照)。制作年代が判明する最古のものは天保七年(一八三六)(No.5「丙申正月廿四日、同佐藤正節、蒲池君逸、從旭莊先生、向別府途上作」、No.88「丙申歲暮」)で、最新のもののは明治十五年(一八八二)(No.154「慧燈大師諡号」)であり、前述の

通り明治十六年（一八八三）以降のものは確認されない。また、『詩鈔』・『続詩鈔』・『詩集』のいずれにも収録されていない漢詩も見られる。

いかなる経緯で本資料が白華文庫に所蔵されるかは不明だが、白華が五岳と会って詩稿を直接目にして筆写したと考えられるほか、白華が宗門や咸宜園の人脈を利用して、五岳の詩稿や詩集、あるいはその写本を入手する機会があったものと思われる⁽²⁾。本資料中に収録する漢詩にも、法主（厳如・大谷光勝、No.143・144「奉 法主猊下」・細川千巖（No.137「似大講義千巖」）・樋口龍温（No.138「似香山院講主」）・徳永賢誠（No.56「送徳永賢誠遊学」）ら宗門の人物や、広瀬旭莊（No.5「丙申正月廿四日、同佐藤正節、蒲池君逸、従旭莊先生、向別府途上作」）・長三洲（No.60「送長三洲之浪華、別後有懷」）・柴秋邨（No.91「寄柴秋邨在阿波」）・長梅外（No.92「寄長南梁」）・広瀬青邨（No.116「次廣青邨壬申新年之作」）ら咸宜園出身者の名前が見える。

題材についても、前述のように咸宜園関係者との交流や、西南戦争（明治十年、No.140「丁丑夏日熊本城下作」・141「田原坂」・142「入薩」・145「扈從過耶馬溪有此作」・146「弔某將校未亡人」・147・148「乱後偶成」・150「法嗣猊下自九州帰山後奉寄贈」・152「観西郷隆盛墳墓凶有此作」）のほか、幕末期の情勢（No.94「偶感」・No.98「安政乙卯書事」）、維新後の藩籍奉還

（No.113「己未新年」）や日田県の廃止（No.112「廢日田県合大分県」）についてうたっている。また、宗門に関するものとして、上海別院開業（明治九年、No.134「賀支那別院開業」）、親鸞（明治九年、No.132・133「祝贈号」）および蓮如（明治十五年、No.154「慧燈大師諡号」）に対する大師号下賜、法主・厳如の還暦を祝う詩（No.149「法主閣下六十高寿」）などを収録している。

詩題および本文について、刊行された『詩鈔』・『続詩鈔』・『詩集』と異同があるものがある。例えば、本資料では詩題がNo.115「慶喜公垂釣図」となっているものが、『詩集』では「西郷隆盛」となっている。

本資料には、多くの漢詩に批点が附されており、『東瀛詩選』にも採録された二首（No.3「題楊妃洗祿児図」、No.53「丁酉春日」）にも批点が見られることから、兪樾が『東瀛詩選』採録にあたって附したものである可能性がある。

なお、岡井慎吾「北方心泉上人（三）」⁽²⁾には、以下の記述がある。

此くの如く詩選の材料となつた詩集は上人より兪樾に届けられたのだから、其等の本は上人へ返送せられて、一時は常福寺に堆く、上人の親友で有り、私の恩師で有る三宅真軒先生は其の詩集を見られた事が有り、詩選に収めるに当りて兪が往々字句を直したのは各巻に朱が入つて居り、

「写し取つて置かうと思ひ乍ら果さぬ中に金沢を去つてバライた（金沢での「しまつた」の方言）」と云はれたを記憶して居る。が、今は一冊も存せぬ由。私がこの話を聞いてよりも四十餘年だから已むを得ぬ。

つまり、岡井が師匠の三宅真軒²³からの伝聞として、『詩選』編輯時に使用した詩集類が北方心泉の自坊である常福寺に残されており、それらの詩集には往々、編輯時に兪樾が行つた字句の訂正が見られたという。そのため、本資料も他の資料と共に心泉に返却されたのち、心泉から白華のもとに戻された可能性がある。

以上の点に加えて、そもそも本資料は白華文庫以外に所蔵が確認されないだけでなく、兪樾自身が『東瀛詩選』中で「著有「古竹邨舎詩」一卷」と述べていることから、本資料またはその写本が心泉を経由して兪樾のもとに送られ、『東瀛詩選』編纂に使用され、のちに白華の手元へと返却され現在に至っている可能性が高いのである。

よって、本資料の重要性に鑑み、このたび翻刻することとした。

凡例

一、漢字表記については、原則として現在通行の印刷字体を用いた。

一、本文中の句読点および批点は、原文に従った。

一、判読不能の箇所は、□で表記した。

一、括弧「」は、加筆をあらわす。

一、題目には便宜上括弧「」を附し、各漢詩の冒頭には通し番号を算用数字で附した。

一、『詩鈔』に採録が確認されるものには○印を、『統詩鈔』一

巻に採録が確認されるものには△印を、『詩集』に採録が確認されるものには◇印を、それぞれ附した。

一、丁数等については、（一表）のように、（一）内に漢数字と表・裏を用いて丁数と表裏を標記した。

翻刻

五岳道人

古竹邨舎詩鈔

（表紙）

「題自桃源²⁴」

1 ◇方寸仙源在、逍遙誰得從、已無秦漢晉、豈有夏秋冬、酒

力²⁵□春氣、童心守老容、欣然写吾意、便更問漁蹤。

「醒齋」

2 ◇眠亦任不醒、童子呼不起、酒亦任不醒、先生常醒矣、人或醉利名、不許入斯裏

〔・〕「題楊妃洗祿兒圖」

3 ◇〔・〕韓休一去直臣稀、天下日瘦□□肥²⁶、金鑑書蠱玉鐙

(一表)

進、明皇不明倦萬機、有子三人同時戮、翻養胡兒入房
幃、銀盤激灑御溝水、猪龍蜿蜒浴其裏、彩綉金輿光照
宮、宮娥微笑天顏喜、報道三日皇子生、胡為姓安不姓
李、四紀為帝稱太平、一朝城闕烟塵生、誰知懸鼓歛樂
日、己兆勒帛悲泣声、我、按唐書不載此、天寶遺事非正
史、温公採之良可疑、袁枚此論或誤矣、君不見天上、女
兒鋪白檀、沙上鳧雛傍母眠、一出唐書一□集、斯事其然
豈其然。

「過妓王故居」

4 ◇何須姊妹競恩華、一入禪場与世賒、不做昭陽疊成

(一裏)

帝、敢同西子誤夫差、佳人末路多娣佛、名妓前身是落
花、舞袖翩々今那処、唯見遺像掛袈裟

〔丙申正月廿四日、同佐藤正節、蒲池君逸、從旭莊
先生、向別府途上作〕

5 ◇野日嫩暄花亦開、閑游探句恰時哉、四人將向温泉浴、二

豎却為勝地榦、一路微風春暈散、他山殘雪暮寒來、此行
尤喜伴韓愈、手勢何勞敲与推

「誦陸詩」

6 ◇晚歲龍鍾草莽臣、独嗟南北議和親、聽來一夜幽、齊雨、憶

起七年他、国春、枉号放翁原志士、常希飛將亦

(二表)

詩人、数行淚下知何事、金鎖緑沉空暗塵

「舟過須磨」

7 ◇鄉思殊向暮天多、肱枕搖々卧海波、月入篷牕人不覺、孤

舟載夢過須磨

「雪」

8 ◇四望濛々白勢驕、瓊花頻向曉風飄、松猶未屈誇強項、竹

独何縁甘折腰、貧裏照書非耐久、愁邊粘鬢或難消、晴簾

撥起詩思動、不必乘驢過灞橋

「墜葉」

9 ◇寒炉好拾墜紅燒、不用採薪追老樵、古井已埋微有

(二裏)

口、低墻稍没欲無腰、秋皆在地空狼藉、月独守枝何寂
寥、倦枕醒來清曉夢、時聽隣箒響蕭々

「題松帶凌霄花圖」

10 ◇高処何縁托此身、凌霄有意附龍鱗、長松応作毛生笑、恰

似囚人成事人

「歸家」

11 ◇柴門鳥雀有歡声、卒爾歸家帶旅情、簞箬未収因作枕、夢

中猶在客途行

〔讀高山彥九郎傳〕

12 ○◇ 欲向青山賦采薇、江湖迹似獨鴻飛、北游燕市悲。

(三表)

癸、西入秦闕知己稀、身後千金駿骨貴、骨中萬里鵬心
違、天涯何處理孤憤、牛斗茫茫劍氣微。

〔題富士山圖〕

13 ○◇ 突兀排元氣、伯仲視崑崙、玲瓏天半雪、萬古照扶桑

〔題桃源圖〕

14 ◇ 雞犬聲聞不見家、仙凡分處白雪遮、無心却是洞中水、流
向人間送落花。

〔牡丹〕

15 東風滿目捲黃埃、梨雪櫻雪次第頽、亦是花中孟之

(三裏)

反、牡丹緩々殿春來

16 ◇ 魏紫姚黃照眼明、花欄日暖睡思生、何來忽地風吹雨、聽
作漁陽鼙鼓聲³¹

〔鏡坂 景行天皇遺跡〕

17 ◇ 我武維揚西狩時、行看風土六龍遲、地形依旧猶如鏡、落

日空山讀古碑

〔普門寺有征西將軍墓〕

18 △◇ 塔傾堂荒佛威消、猶有殘僧守寂寥、欲問征西皇子迹、
茫茫秋草沒南朝

〔遊志賀島〕

19 ◇ 波濤萬里接樽前、也學長鯨吸百川、欲舉一杯酌箕子、鵬

(四表)

雲垂處是朝鮮

〔辨才坂〕

20 ◇ 攀躋漸覺近天闕、空翠霏々撲我顏、半日山程步虛似、白
雲相送到人間

〔濱市 一名邯鄲市〕

21 ◇ 綾羅滿目競光彩、汗漫聊遊歌吹海、唯恐勿々成夢來、邯
鄲市上觀傀儡

〔宰府謁菅丞相廡〕

22 三鱣呈瑞果何因、終見蒼蠅上棘藜、千古追崇闕

(四裏)

壯穆、一時遷謫屈靈均、梅花零落戒壇雨、客意蕭條旧府
春、欲向鶯兒問此意、暮天如墨獨傷神

23 遙在西瀛恋九重、衣冠憔悴謫居容、入詩都府樓殘瓦、醒

夢觀音寺夜鐘、一代文宗压藤橘、千秋威靈見梅松、欲尋

當日拜天處、雪護崔嵬有獨峰

〔辞太宰府〕

24 ◇ 流連次第向前途、幾見離筵酒滿壺、一曲竹枝声未断、落
花風裏出西都

〔庚子正月十八日、盜入予家、会余未寐、不得志而去〕

25 ◇東家啼兒声漸収、西家織婦梭初休、窓燈影凍霜氣重、斜月一痕帶茅樓、有人偃僂循墻入、遲々暫步又暫立、定是隣友訪閑來、門扉微鳴任彼開、外堂入室猶未已、遂成梁上之君子、盜又有道渠何踈、未入合知有与無、搜而無物渠笑貧、勞而無功我笑愚、夜意蕭条盜去後、我亦欲偷隣舎酒

(五表)

〔芳野懷古〕³⁴

26 ◇羈人懷古立斜曛、草没荒陵路不分、杜宇一声春似夢、南朝恨在夏山雲

〔夢登不二山〕³⁵

(五裏)

27 ◇日出処山日没処山、芙蓉崑崙伯中間、自餘群山皆雌伏、泰華嵩衡豈抗顔、我忽生翼一擊揚、風斯在下迹茫茫、須臾飛上芙蓉頂、天闕咫尺仰玉皇、脚踏三峰睨八紘、心与宇宙同洪荒、東望靺鞨北朝鮮、支那印度天西邊、南溟渺茫無際涯、蛮虜信絶水拍天、脚根下有洲六十、俯視山河与城邑、如今海東正文明、詞林往々出俊英、鼓旗相分幾壇上、恰似中原逐鹿情、畢竟不出蜻蛉裏、何異蝸牛角上争、唯須如日出処山、向日没処競崢嶸、大笑一声天風起、吹落我夢五千仞

29

〔送月庵上人帰筇山〕

(六裏)

28 ◇花之於美人、形容差可擬、櫻不堪其艷、有似歌舞妓、桃不堪其粗、有似村女子、梨花太冷淡、喪婦謝羅綺、紅杏如銜奸、梅也獨負嫺、神遠而跡邇、才不減嬌施、德亦視任姒、野農觀梅花、渠晒人之鄙、貴人觀梅花、渠厭人之侈、唯有方外人、相看称知己、我欲問芳訊、先自南溪始、寒中帶殘沙、短橋卧駛水、初月澹未光、暝烟伏稍起、夕景窓靄間、有物昂然峙、不用萬朶榮、数枝乃足矣、歸袖携清香、以入山窓裏、身閑遂真賞、世人豈有此、花莫如寒梅、人莫如寒士

誰知方外旧交情、豈只世間風月盟、何日同移安養界、茫茫前夢話多生

〔寄題山口氏櫻谷莊〕

30

祖先餘慶遠、守得旧田園、屋為有山潤、人因無事尊、館名号櫻谷、地勢似桃源、雖未到斯境、吾豈敢妄言

〔詠史 明建文帝〕

31

一領袈裟豈偈然、早知皇祚遂難全、宮中忽失半邊月、落在江湖四十年

〔臨臯亭〕

(六表)

(七表)

32 △ 孤亭突兀倚林頭、野菊花開溪路秋、不見風流歐太守、青山依旧遼瀛州³⁷

〔題畫二首〕³⁸

33 ◇ 功名不換一蓑衣、世路知他別有波、料得江流春已老、網中魚少落花多

34 ○◇ 紅塵欲染白雲情、累月滯留在帝京、空使松風吹萬壑、青山少我讀書聲³⁹

山少我讀書聲

35 半生風月一青樽、筆硯優々亦佛恩、他日空留三尺墓、老梅花下葬詩魂

〔用東坡題郭熙畫詩韻〕

(七裏)

36 ◇ 塵海滔々波難閑、吾儕上策不出山、何人欲題夜愁曲、長星影落一杯間、白雲紅樹秋色遠、數声呦鹿林日勉、有人

独对西江水、坐待初月出青巖、興到偶扞鷺緜霜、我画何

〔擬〕郭河陽、噫噓乎天地何処無閑日、閑忙之際只一髮、門外頂頭風吹塵、題詩誰異此水名⁴⁰

〔題山水圖〕⁴¹

37 ◇ 急雨從東至、涼生戶牖間、殘雷声已遠、又見夕陽山

38 ◇ 老僧与老妓、閑話廿年情、難尋春夢迹、寒柳坐殘

(八表)

鷺

39 ◇ 鑿海外胡易、除胸中鬱難、酒如一敵国、為我破天寒⁴³

40 ◇ 黒木宮何処、千年遺迹多、一声殘果墜、古井忽生波⁴⁴

41 ○◇ 人生貴無事、不爭名与功、鳥遷喬木後、幽谷亦春風⁴⁵

42 湖海十年迹、空過苦吟間、縱有知音賞、不如歸故山

43 茫々蘆荻外、突兀見津樓、知是海潮進、埜川忽逆

(八裏)

流

44 △◇ 江湖流落間、幾醉菊花酒、借問故山秋、白雲無恙否⁴⁶

45 ◇ 千山雪初霽、江上白崔嵬、有人携酒到、再贈一枝梅⁴⁷

46 ◇ 孤洞窅然深、丹壚烟未起、方画誰得窺、藏在古雲裏⁴⁸

47 ○ 与世分鴻溝、山中有老屋、先生高卧邊、只許白雲宿⁴⁹

48 丹壚烟氣絶、空洞古雲留、先生騎鶴去、知是到揚

(九表)

州

49 ◇ 旅舍望前駅、棧長疲馬嘶、寒山行不尽、日落古関西⁵⁰

50 孤山伴処士、飲啄傍梅花、昨登応自悔、曾上大夫車

51 △◇ 一路多楊柳、溪邊淡暮烟、得魚人已去、沙上有遺筌⁵¹

〔梅花書屋圖〕⁵²

52 ◇ 世間今日事紛然、誰逐功名先着鞭、別有梅花旧高士、空

山夜月水潺々

(九裏)

〔丁酉春日〕⁵³

53 ◇ 青山十載養痾身、偃蹇翻為佔僇囚、遷舍遺恩思慈母、趨

庭。慈。訓。夢。先。人。月。來。愁。処。還。良。夜。花。向。貧。家。不。惜。春。遮。莫。
弟。兄。皆。碌。々。書。前。並。坐。一。燈。親。

〔古竹邨舎〕⁽⁵⁴⁾

54 ◇老僧家似老農家、緑芋遮門一逕斜、猶是東籬秋色遠、南
瓜架上見黃花

〔雲軸老師死後題其図〕

55 図画猶存人已非、雲烟鬱勃墨淋漓、請看岌々危將倒、山
似老師沈醉姿

(一〇表)

〔送徳永賢誠遊学〕

56 ◇別。時。無。物。贈。一。語。向。君。陳。後。欲。得。娛。樂。初。宜。嘗。苦。辛。折。
枝。從。長。者。選。友。近。端。人。行。矣。西。州。路。秋。風。吹。獨。人

〔戲贈売虫翁〕⁽⁵⁶⁾

57 ◇教人頓有野邊情、虫在籠中種々鳴、生計知翁真不俗、長
安市上売秋声

〔詠史〕

58 ◇今日賊皆滅、七生君莫勞、嗚呼南木氏、万古一忠高

(一一裏)

59 ◇風波或恐及袈裟、慙愧吾心未出家、天地百年真是夢、笑
見寒月上梅花⁽⁵⁷⁾

〔送長三洲之浪華、別後有懷〕⁽⁵⁸⁾

60 ◇故人分手已三朝、独倚溪亭宿酒消、休向東風弄長笛、梅

花。零。落。雨。蕭。々。

〔遊穴平〕

61 溪昏蝙蝠掠蟬飛、墜葉堆中水脉微、老衲見人無一語、雞
冠花外曬禪衣

〔京城逢秋〕

(一二表)

62 ◇寒蟬鳴斷夕陽愁、天末浮雲跡未収、不独宮槐城柳色、貴
人今日亦知秋

〔寓居寂寞讀書於窓下偶逢故人話〕⁽⁵⁹⁾

63 秋風萬里為書忙、道聽海天波浪狂、迂濶先生人自恕、黃
花如例賞重陽

64 ◇不見當年蘓小家、依稀夢斷旧繁華、東風吹恨佳人尽、才
子空吟都李花⁽⁶⁰⁾

〔京城逢冬〕⁽⁶¹⁾

65 ◇百舌声寒野有風、飄蕭婦袖度川東、茅花遠接蘆花白、一
路人行暮雪中

〔某上人手造雪佛一軀見贈因有此作〕⁽⁶²⁾

66 ◇一。佛。來。現。何。飄。忽。相。好。端。嚴。晶。々。潔。此。佛。難。留。火。宅。中。色。
即。是。空。々。即。色。上。人。贈。我。有。心。哉。報。知。无。常。之。迅。速。佛。耶

雪。耶。兩。不。存。流。入。研。池。水。一。滴。嗚。呼。有。我。明。日。無。我。亦。人。
間。一。雪。佛。

「米法山水圖」⁽⁶⁵⁾

67 ○◇ 亂山堆裏掩山門、繞屋松泉聞不喧、誰使老僧高臥穩、白

雲一片亦天恩

「庚辰新年」⁽⁶¹⁾

68 鄉曲年豐酒味新、繽紛鼓笛賽田神、鶯湖山下景

(一一表)

相似、亦見家々扶醉人

「自画山水」⁽⁶⁵⁾

69 ◇ 閑中日月任吾愚、点綴雪烟独自娛、堪笑画禪三昧裏、沙

弥写出捕魚圖

「探梅」

70 ◇◇ 寒声在屐老冰遮、南澗尋春不厭賒、寄謝當年澹臺上、暫

時由徑為梅花

「苦熱」

71 午熱相烘困夢回、盆蓮偶見數花開、輕雷何處天如墨、已

有微涼先雨來

(一二裏)

「新年」

72 捨々功名我豈能、世途何用蹈嶢嶢、鳥從幽谷遷喬木、魚

在深淵隔薄冰、忙裏青雲付才子、閑中白日照愚僧、山居

不覺入新曆、只見梅花笑屋稜

「其二」

73 何料廿年多病身、閑遊今日賞芳辰、繽紛雪散渚宮暮、窈

窕雪粧水寺春、前有醉人花得意、傍無俗樹柳成隣、老境

唯忘耽觴詠、不許風塵侵隱倫

74 ◇ 欲出厭他門外塵、迺然成画有心哉、春菘秋菜淡

(一三表)

風味、好向此中歸去來

75 糸竹声哀雲欲停、殘春聊上此旗亭、任他居易歌長恨、不

許屈平誇独醒、芳艸萋々經昨雨、殘花落々似晨星、明朝

76 ○◇ 湖波澹蕩蘸孱顏、遙憶梅花夢寐間、吟斷暗香疎影句、分

明一夜到孤山⁽⁶⁷⁾

77 ◇ 水濶遠鐘声到遲、蘆花如雪白雲涯、心逢秋冷羈人

(一三裏)

夢、正見吳江楓落時⁽⁶⁸⁾

78 ◇ 孤行幽谷中、隱氣忽料峭、天容現小青、混勢飛長皎、吁

喁如有人、山風吹木竅⁽⁶⁹⁾

79 ◇ 遙望故人天一涯、三春寂寞在京華、劉即去後無消息、落

尽玄都觀裏花⁽⁷⁰⁾

「暮春病中六言」

80 春老風々雨々、故人望斷天涯、病中寂寞長日、夢裏繽紛

落花

(一四表)

「憶友人在京師」

81 上国故人遠、相逢夢易回、鴈外數帆白、或有一書來

「掩門読」⁽⁷¹⁾

82 ◇寒雲帶屋压林扉、仰望天文星斗稀、独笑却從孤憤発、有人深夜読韓非

「病中」⁽⁷²⁾

83 ◇雨後苔痕合、風前竹色多、先生有微恙、終日読維摩

「題画」⁽⁷³⁾

84 ◇籬落花開村酒香、風光早已近重陽、年魚下尽秋溪寂、只見孤鷺坐麈梁

(一四裏)

「義仲寺」

85 ◇奇勲压倒大頭公、深惜先鞭不善終、想像將軍當日恨、芭蕉葉畔立秋風

「芭蕉翁」

能。使。鬼。神。泣。老。媪。亦。解。頤。国。雅。十。七。字。苦。吟。風。月。知。芭。蕉。翁。出。世。誹。風。亦。又。移。神。韻。伝。一。脉。百。世。長。為。師。我。画。翁。之。像。并。録。翁。之。辞。鴉。棲。于。枯。木。蛙。投。于。古。池。天。籟。安。可。写。我。語。謾。搆。思。

「題自画山水」

87 今日諸公勞廟謨、頻聞夷舶至邊隅、国憂不入山僧

(一五表)

筆、自写白雪高臥図

「丙申歲暮」⁽⁷⁴⁾

88 ◇蝗後村閭物色荒、欲春唯有野梅香、免租敢望漢文帝、移粟未逢梁惠王、鳥並簷端啄残雪、魚浮水面恋斜陽、詩人元自少温飽、不妨酸吟搜餓腸

「偶感」⁽⁷⁵⁾

89 ◇談兵同趙括、獻策異王通、搔痒多靴外、窺天或管中、浮雲橫大野、淡日土寒空、我感到誰語、梅花照小櫺

「題画」

90 蘆花如雪白颯々、滿目風烟欲暮秋、恰是漁人婦去後、一江明月照虚舟

(一五裏)

後、一江明月照虚舟

「寄柴秋邨在阿波」

91 兀座蕭然影弔形、深宵披史一燈青、獄中公子憐孤憤、沢畔大夫歎独醉、梅早動逢霜雪厄、松高或触斧斤刑、多君夙絶官途念、遙碧分明処土星

「寄長南梁」⁽⁷⁶⁾

92 ◇汗漫何必事棄蓬、早買青山寄此躬、画不爭名今世際、詩將挾友古人中、公超去後市無霧、弘景卧邊松有風、日暮先生撫初起、一声孤鶴度遙空

(一六表)

93 ◇ 結交燕趙悲歌士、混跡江湖放浪兒、今日龍鍾豪氣尽、禪

堂坐雨老沙弥⁷⁸

「偶感」⁷⁹

94 △ 紛々海防策、未見虜氛除、雀語乱平野、鶴心冲大虚、儒、
將併蛮学、僧亦誦兵書、世上看如此、雲峰石磬蹀。

「題左馬助渡湖之図」⁸⁰

95 ◇ 横截大湖一、鞭風、雪濤滂渤馬如龍、萬兵瞳若空在後、空

明唯望飛電蹤、君不見本能寺裏鼠食馬、凶兆早見惡夢
中、天王山畔争天運、猴面豎子終成功、桀狗吠堯豈得
已、逆中守順亦是忠、不忍崑玉付一火、

(一六裏)

輸之歎、管何雍容、嗚呼君心濶於琵琶濶、清風留在唐崎松

96 ○◇ 水涸秋江砂嘴長、蘆花如雪映殘陽、禾收原上雀声少、雲

尽天心鶴意揚、田送餉時無葛伯、社分肉处有陳郎、閑遊
深感昇平沢、埜店自由呼酒觴⁸¹

「小春日書懷」⁸²

97 ○◇ 誰擊無壺歌古詩、寒風蕭颯弘虬髭、乳狼吼月山難睡、鳴

鶴在皇天未知、名士寧無一狐腋、閑人徒有五羊皮、乾坤
納々年将暮、榑柸炉邊举酒卮

(一七表)

「安政乙卯書事」⁸³

98 長星形如簪、連夜現西方、無人勸一杯、次第消光芒、墨

夷来浦賀、鄂羅至寄陽、羽檄東西飛、沿海守衛忙、世上
雖恂々、未足為国殃、廊廟有良圖、下民何得量、羶虜須
速去、給汝統命湯

「其二」

99 長城萬里絕、級々防北胡、不知病在內、鮑魚遂上車、外

寇如外邪、易入亦易驅、痺胃苟能実、病魔安得覩、国家
二百年、其治過唐虞、內無腹心患、何学杞人愚、徒然日
本刀、今日無所須、来々黑白虜、試之

(一七裏)

汝頭顱

「其三」

100 朝閱千慮策、夕講籌海篇、暫出鐘魚界、俄持兵馬權、豪

氣吞西洋、粉壘夷狄船、功成振衣去、又傍由白雲眠、癡
夢忽然醒、秋風吹夜禪、一炉香縷乱、猶疑燒賊煙

「其四」

101 △ 昨宵有癡夢、慚愧道学淺、心兵触時動、妄想無由殄、独

起嗽寒泉、静閱空王典、梵唄震空林、天籟与之伴、宿鳥
時一鳴、微月上翠巘⁸⁴

(一八表)

「二河譬図」

102 名利紛紜世路塵、百年夢裏走奔頻、無明未曙猶長夜、有

漏何時棄穢身、六道輪回感因果、二河譬喻識貧賤、行穿
水火豈容易、唯恃東西遣喚人

〔其二〕⁸⁵

103 ○◇業海滔々不見涯、願船幸過破波時、津梁開導釈迦遠、出

現待期弥勒遲、六字称号管酒肉、三衣着得帶妻兒、真
宗々意君知否、唯向西方仰大悲

〔其二〕⁸⁶

104 ○◇遣喚有人西又東、道穿水火一条通、多生無限恆沙

(一八裏)

劫、自力何争秦淄功、秋蝶魂寒衰草露、春禽声悲落花
風、百年遊戲娑婆夢、誰入彌陀大会中

〔其五〕⁸⁷

105 ○◇生々死々海茫茫、六道回頭迷亦長、三世因縁聞佛説、百

年天地識魔郷、真心畢竟不思議、煩惱由来無尽蔵、我輩
從今向何処、彌陀大会在西方

〔其六〕⁸⁸

106 ○◇僧家未免世間情、名利紛紜罪豈輕、多劫將沉阿鼻獄、真

心直入涅槃城、佛恩祖德仰他力、何肉周妻歎此生、無戒
比丘還自愧、春風随意賞花行

(一九表)

107 ○◇伝聞行人道路艱、森然画戟守青山、梅花不避要衝地、開

在関門殺氣間⁹⁰

108 ○ 干戈和幾日、天地維新聞、破敵付兒輩、先生坐見山⁹¹

109 ○◇一路猶迷戰後塵、空山落日足傷神、姓名標在埋死処、頻
弔春閨夢裏人⁹²

〔寧馨兒〕

110 衣冠零落在西陲、落淚時和菅公詩、左遷猶喜傍梅

(一九裏)

花、天拜山下三年思、俄然大柄掃手裏、待得死灰再燃
時、回天旋地太容易、豁眼瞭然視華夷、四季貯春春如
海、玉堂深々護蛾眉、唯使牡丹跨富貴、既忘梅花旧風
姿、嗚呼天下蒼生惴々日、老天復生寧馨兒

〔黃金壺〕

111 黃金壺裏貯黃金、相贈試見汝之心、一擊無壺黃狼藉、

煌々或在布金域、狎客娼婦皆蒼皇、人々拾得掬滿黃、我
豈敢私君公賜、分之欲示俠骨異、君不見紙金今日天下
敷、有真有贗、兩模糊、窮民壳薪得一片、人道是亦觚不
觚、三寸之紙徒在手、安知世有黃金

(二〇表)

壺

〔廢日田県合大分県〕⁹³

112 県政東移一夢醒、我郷文物亦伶俜、徒聞射利有才子、虚

歎仰天無德星、米買開場憑廢塾、野狐聽訴坐空庁、漸々
依旧三隈水、逝者如斯流不停

- 118 青山原是讀者躬、都下寧吟花柳風、更向叢林宜苦學、唯期大法護持功
- 117 ◇飄然提筆出鄉閩、至處人求醉墨痕、浪迹如魚遊大海、文壇逐鹿向中原、金蘭最憶暮年友、雲樹應傷他日魂、我輩唯同猿鶴對、已無白髮倚闥門
〔送中村智眼〕
(一一表)
- 116 ◇人望青雲各競先、即今誰着祖生鞭、山如太古猶能靜、花遇維新不改妍、宮內還知養蠶術、世間頻颺炙牛烟、轉喜邦俗須臾變、道是文明開化天
〔送夕田千原翁東遊〕
(一一表)
- 115 ◇芙蓉變態任浮雲、大麓茫茫海色分、斧鉞投來理蓑笠、新漁人是旧將軍
〔次廣青邨壬申新年之作〕
- 114 俄然逢着一新天、何用滄棗驚變遷、版籍奉還千里地、東都門外買瓜田⁽⁹⁵⁾
〔慶喜公垂釣〕⁽⁹⁶⁾
(二〇裏)
- 113 ◇古旧団欒酒滿壺、閑談時事飲吾廬、將軍辭職霸廷廢、封建改國候國際、武士或成龍斷容、儒生亦說蟹行書、請君休歎滄棗變、即是文明開化初
(二〇裏)
- 119 島妓重遮護古閩、滄浪蘸影幾孱顏、砲臺已廢猶留迹、曾醉胡船此海湾
〔寄陽〕
(二二裏)
- 127 笑他小鳥競遷喬、幽谷迎春樂意饒、簷有梅花厨有肉、今朝即是旧元朝、肉一作酒
(二二裏)
- 126 臆中春至未知春、時事如雲變態頻、餅插梅花夜呼酒、人間猶有旧閑人
〔次廣青邨壬申新年之作〕
- 125 ◇世態變遷何用嗟、旗亭隨處酒可賒、老來頻見新奇事、四与水忘、人靜与心愜、西牕夕陽好、支頤看紅葉⁽⁹⁸⁾
月春風吹百花、可作「相又堪」⁽⁹⁹⁾
- 124 ◇伶俚老境心、有如秋暮蜨、古逕尋殘芳、徘徊移步履、塵海風濤驕、畏途悔昨踏、禪榻茶烟颺、閑侶却今接、魚躍
- 123 ◇旧習未除文字綠、滄棗幾變苦吟邊、青燈一穗猶相對、夜雨声中七十年⁽¹⁰⁰⁾
(二二裏)
- 122 ◇農舍原無文字因、悠悠何異結繩民、兒孫今日新知字老、阿爺猶太古人⁽¹⁰¹⁾
- 121 誰試西洋砲、方雷震海湾、恨他硝藥氣、奪我面前山
- 120 ◇請看漁村農圃間、文明風教化痴頑、壳魚壳薪向城市、亦為兒孫買筆還⁽¹⁰²⁾
(二二裏)

「東民渡邊公見惠瓢及杖副以高吟賦此答謝」^(註)

岳

128 ◇公賜瓢与杖 副以幼婦詞 此瓢便々腹 貯得春四時 此

杖倚々竹 製成玉一枝 相携出門去 意行処々移 觀雪

坐石上 逢梅立水涯 瓢也侍我傍 杖也支我頤 酒尽飲

樂尽 此味少人知 空瓢掛在杖 歸路晚風吹 聊和瀝々

邑 高吟我公詩

(二三表)

129 ◇往事回頭淡夢同 過來世路々幾窮 愁三千丈髮如雪 人

七十齡心似童 天地自然消殺氣 柳梅容易又春風 老餘

至樂一杯酒 醉在兒孫团坐中^(註)

130 ◇寒厨有酒不知寒 差覺醒中天地寬 驚馬寧堪千里遠 鶴

鶴早占一枝安 從心所欲齡初及 与世推移事亦難 富貴

功名皆是夢 慙慙何必慕邯鄲^(註)

「悼村上佛山」^(註)

131 驚才亦願接名流 久企佛山堂上遊 老衲雖存感何已 先

生既逝見無由 文壇忽地将星落 詩国黯然天

(二三裏)

日愁 正坐焚香披遺集 一瓶露 泣殘秋

「祝贈号」^(註)

132 ◇滄乘幾度眼前移 我法依然猶護持 王沢遍濡新雨露 佛

恩長仰旧慈悲 僧官廢去貴高德 宗祖贈來称大師 鳳詔

今朝到龍谷 見真二字自天垂

133 ◇凡愚亦過出難時 九十年來果為誰 宜向西方尋本地 偏

忻未代得明師 見真早作真宗祖 留法長開法主基 今日

天恩伝諡号 更令寰宇仰威儀

「賀支那別院開業」^(註)

134 ○弘教時哉渡海行 支那別院已經營 好風報喜從西

(二四表)

到 四百餘州念佛声

「記喜」

135 西向平安鳳輦移 旧都復見瑞雲垂 何凶龍体臨獅座 轉

喜皇威帶佛恩 大法益高因有主 祖師所勸本無私 箕封

禹域亦欽仰 教誘只須酬聖詩

「庚辰新年」

136 醉餘揮筆々縱 横春酒三杯詩画成 遮莫被人呼長物 唯

慙向世布虛名 揚々不羨青雲士 得々原甘白髮情 尊大

自居郷党会 諸年少恕老先生

「似大講義千巖」^(註)

(二四裏)

137 ◇津梁任重一身輕 不厭山程又水程 我佛行応臨鬼界 伊

人早已入麀城 信風吹渡蛮荒地 法雨濺來枯渴氓 仔細

并談真俗諦 要將教誘答昇平

「似香山院講主」^(註)

138 ◇齡近八旬身未衰 空門泰斗屬吾師 蟹行文字爾為爾 獅

吼音聲知者知 滋蔓幾年憂異教 津梁千里向邊陲 恰逢
護法苦辛日 不是白雲高卧時

139 年豐誰意不揚々 濁酒黃花笑語香 独有人情未忘旧 十
月七日作重陽

(二五表)

〔丁丑夏日熊本城下作〕

140 ◇四面皆賊簇如雲 城在雲中級々分 滿目今日真火国 市

塵村落一時焚 城兵如魚在釜中 城將心居恭山安 破裂

丸飛迸烈焰 雲梯渠學彼魯般 勿使萬雷發自地 火車何

必仿田單 六十日間無虛日 攻守一日幾艱難 軍粮如

山々亦尽 賴有我兵力能彈 雖能彈力色欲菜 千竈烟絕

兵氣寒 都督大兵知在近 大喊声隔一山間 城兵驀地出

擊賊 々軍崩去似倒瀾 嗚呼日本國中已無城 唯有此城

遮賊氛 守城者誰谷少將 築城者是當年鬼將軍

(二五裏)

〔田原坂〕

141 ○砲声乱發萬雷驚 賊与官軍此地爭 戰後僅過三十日 田

原坂上詠詩行

〔入薩〕

142 ◇屍接于屍橫曠原 幽魂如螢魂触魂 五十日前新戰場 風

愁雨悲日色昏 旅僧今夜投何処 雞犬声絕空有邑

143 〔奉 法主猊下〕

◇宗主何心不顧躬 來衡炎熱火烈中 津梁多少經艱路 教
誘慫慫答治功 是為暁天懸佛日 能令法兩伴

(二六表)

仁風 勤勞承得大師業 頻向邊陲西又東

〔其二〕

144 百戰場開国欲空 熊城今日曠原同 閭閻全没灰塵底 老

幼看填溝壑中 誘導徧勞身後道 慈悲亦救眼前窮 真宗

法主從東到 衆庶忻々草動風

〔扈從過耶馬溪有此作〕

145 ◇峰巒重疊水回環 坂作羊腸往似還 羅漢披雲迎法主 津

梁取路入名山 人心差穩兵戈後 宗意亦伝丘壑間 今日

偶過形勝地 暫時駐駕对孱顏

〔弔某將校未亡人〕

(二六裏)

146 寡居慵扨鏡臺塵 時講女箴兒女親 暗淚誰知濕香火 北

邨斜日祭良人

〔乱後偶成〕

147 西南祲氣暫時橫 凶醜何曾妨太平 霸者餘風随逝者 封

侯遺跡認空城 縱令国有維新日 安得人無思旧情 如意

支願見後世 青山独坐老先生

148 ◇我年七十夢匆匆 異事頻逢老境中 丁丑兵塵自春起 西

南禊氣至秋空 前車覆作後車戒 萬骨枯成一將功 眼闕
滄棗知幾度 新詩写感示隣翁¹⁴⁹

〔奉祝〕

(二七表)

法主閣下六十高寿

高齡方六十、惟德自穹隆、能守大師業、遙追諸祖風、津
梁侵遠嶮、教導發群蒙、淨土欣求術、法城嚴護功、世間
皆渴仰、海外亦尊崇、萬里波濤靜、一天雲霧空、真宗有
真主、佛日上于東

〔法嗣猊下自九州歸山後奉寄贈〕

150 津梁千里入西州、一路風烟憶昨遊、借問玉堂歸卧夕、夢
魂猶到馬溪不

〔老境¹⁵⁰〕

151 △ 老境蕭然樂事空、強呼杯酒對春風、一条白道未行

(二七裏)

尽、猶在東西遣喚中

〔觀西鄉隆盛墳墓圖有此作¹⁵¹〕

152 ○ 庶宇輪奐峙海湄、歲時伏臘肅祭儀、長松落落柏森森、彷彿
當年蜀相祠、想見維新復古際、功非不俾天下知、末路
變作白頭賊、惱〔殺〕生靈罪屬誰、賊魁死後遭人祭、天
亦何心我意疑、君不見勤王忠臣葬魚腹、我憐先死月照師

〔庚辰新年¹⁵²〕

153 閒中弄詩画 豈競藝壇才 七十二齡過 庚辰春日來 池
共塘未生草 籬落欲尋梅 老境歛娛少 乾坤酒一杯

(二八表)

〔慧燈大師諡号¹⁵³〕

154 ◇ 當年能起法威衰 恰過兵戈紛乱時 身迹艱難化都鄙 文
章平易論愚痴 終將諡号擬高祖 請看朝恩贈大師 長使
慧燈光不斷 中興遺德自巍々

〔玄璞石歌¹⁵⁴〕

155 ◇ 壯士毗裂睨柱楹 一擲將碎十五城 既寿永昌秦篆俗 奇
辱誰憐满面鯨 此石亦是荆山寶 大璞渾然態自保 三獻
不触玉人手 深韜光輝見有道 立骨峻嶒雪染眉 恰似禪
老坐睡姿 不知睡中結何夢 西向故山万里歸 君不見秦
人鞭箠石亦厄 浮海遙追徐生

(二八裏)

跡 旧侶寥落今幾存 穀城山下有黄石

(二九表)

(別紙)

〔呈白華師時師自界浦游芳野而西帰〕
今時僧悉俗 公独秉清機 午憩松根石 夕敲巖下扉 茅渚乘
月發 芳野看花帰 上国游方了 西州一錫飛

註

(1) 白華文庫は、本誓寺(白山市)住職をつとめた松本白華の旧蔵書を収めたもので、白華の歿後の昭和二年(一九二七)に同寺境内に鉄筋コンクリート二階建の書庫が落成した。昭和六十三年(一九八八)に、松任市中央図書館編集・大沼晴暉漢籍指導『松任本誓寺 白華文庫目録』松任市中央図書館が刊行され、現在は白山市立松任図書館に所蔵される。

(2) 松本白華は東本願寺(真宗大谷派)の僧侶で、天保九年(一八三八)に加賀松任の本誓寺に生まれ、本名は嚴護、白華・西塘・仙露閣と号した。嘉永三年(一八五〇)に、京都で宮原節庵に書を、海原謙蔵・劉昇に漢学を学び、嘉永五年(一八五二)に大坂の廣瀬旭莊(広瀬淡窓の弟)塾(大坂咸宜園)に入門している。

明治四年(一八七一)、白華は東京で宗名恢復(一向宗↓浄土真宗)に従事する一方、秋月橋門や長梅外ら咸宜園出身者を中心に漢詩結社・玉川吟社が結成され、白華も参加した。白華はここで漢詩文による交流を行ったほか、主宰者の一人である長三洲(長梅外の子)を通じて、江藤新平との関係を構築することに成功した。

明治五年(一八七二)から明治十年(一八七七)まで教部省の官吏をつとめたが、この間、明治五年(一八七二)九月から約一年間に互って、大谷光瑩(現如)、石川舜台、関信三、成島柳北とともに海外視察を行っている。明治十年(一八七七)から十二年(一八七九)まで上海別院輪番をつとめ、帰国後は本誓寺に戻り、主に地元子弟の教育にあたり、大正十五年(一九二六)に歿した。

著書に『正因弁惑論』(明治十七年)が、漢詩集に『金城繁華

三十闋』(明治四年)、『西塘俚歌』(明治二十二〜二十四年)、『越蓑能笠』(明治二十二年)、『白華余事』(大正二年)があるほか、歿後に洋行日記『白華航海録』(加越能史談会『加賀文化』第二号・第四号)・柏原祐泉編『真宗史料集成』第十一卷(維新期の真宗)・同朋舎、昭和五十年)・北川伸三「松本白華航海録(抄)」(『郷土と文化』第十五号)十八号、松任郷土研究会編、松任市教育委員会、昭和六十三年(平成四年)や、『白華護法録』(大谷大文学会、昭和初期)、『白華備忘録』(同、昭和八年)、『白華教部省雑纂』(同、昭和九年)、『露珠閣叢書』(常盤大定編輯『明治仏教全集』第八卷(春陽堂、昭和十年))、『備忘録』(『明治仏教全集』第八卷(同)が翻刻されている)。

(3) 咸宜園入門簿には、「日田郡隈町 釈聞恵 入門 文政二年三月十九日 紹介 釈智英」とある。

(4) 広瀬旭莊(一八〇七〜一八六三)は広瀬淡窓の弟で、豊後日田の人。名は謙、通称は謙吉、字は吉甫、旭莊・梅暎・秋村(邨)と号した。

(5) 小栗憲一(一八三四〜一九一五)は、元園のち布岳と号した。豊後・妙正寺に生まれ、兄の小栗栖香頂と同じく咸宜園に学ぶ。幕末維新期にかけて、長崎などで教会に課者を潜入させるなどの対キリスト教活動に従事した。維新後は宗名回復運動(一向宗↓浄土真宗、明治四年)に参加し、弾正台・監部・宮内省・教部省・大蔵省で勤務したほか、真宗京都中学校長や善教寺住職をつとめた。明治十一年(一八七八)に琉球を、明治三十一年(一九〇八)に韓国を訪れている。著書に、『豊絵詩史』(明治十七年)・『真宗興隆縁起』(明治二十五年)・『小栗栖香頂略伝』(明治四十年)などがある。

(6) 西村七兵衛、明治十七年。

- (7) 晩翠軒、大正十五年。
- (8) 五岳会、昭和五十七年。
- (9) 五岳上人顕彰会、昭和五十八年。
- (10) 大分県立芸術会館、平成四年。
- (11) 五岳百年祭実行委員会、平成四年。
- (12) 妻木直良編『真宗全書』第四十八卷（藏経書院、大正三年）。本書には、小栗憲一「五岳翁小伝」を収録するが、小栗憲一『豊絵詩史』（註6に掲出）に収録する文章とほぼ同文である。
- (13) 『真宗全書』第四十八卷（註12に掲出）。
- (14) 『真宗全書』第四十八卷（註12に掲出）。
- (15) 大谷大学、昭和十七年。
- (16) 五岳会、昭和六十年。
- (17) 朋友書店、平成二十二年。
- (18) 早稲田大学図書館蔵。市島春城旧蔵書で、版心に「愛梅書屋用箋」とある。
- (19) 兪樾（一八二一～一九〇六）は、河南学政提督を担任し、曾国藩・李鴻章らと関係が深かった。『東瀛詩選』編纂にあたった当時、兪樾は蘇州に居住し、杭州に別荘を持っていた。
- (20) 北方心泉（一八五〇～一九〇五）、金沢・常福寺第十四世住職。名は蒙、心泉・小雨・月莊・文字禪室・聴松閣・酒肉和尚などと号した。明治十年（一八七七）から明治十六年（一八八三）まで清国布教事務掛として上海別院に勤務する。明治十六年（一八八三）に肺病のため帰国し、長崎での療養生活を余儀なくされる。その後、三宅真軒の助言のもと書学を学び始め、明治二十三年（一八九〇）に開催された第三回内国勸業博覧会に書作を出品し入賞しており、一般には楊守敬とは別にわが国に北派書風を持込んだ人物として知られる。
- (21) 白華文庫には、咸宜園関係者の漢詩集を多く所蔵するほか、咸宜園出身の長三洲から借りて書写した『蘇東坡詩鈔』（末尾に「安政二年乙卯三月以長茂太郎本謄写」とあり）や、長三洲の明治五年（一八七二）の日記である『韻華樓日記』、同じく咸宜園出身の小栗栖香頂が著した「水築小相伝」（拙稿「白華文庫蔵・小栗栖香頂「水築小相伝」について」（『三松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第四十六集、平成二十八年）に翻刻）を所蔵する。
- (22) 『書苑』第七卷第九号（三省堂、昭和十八年）。
- (23) 三宅真軒（一八五〇～一九三四）、名は貞、通称は少太郎、字は子固、松軒のち真軒・大小廬と号した。学問は富川春塘・井口犀川・永山亥軒・金子松洞に習っていたが、犀川歿後は独学を続け、前田家より流出した『四庫提要』を精読したとされる。明治八年（一八七五）ごろから同十六年（一八八三）にかけて益智館という本屋で働いていたが、明治十六年（一八八三）以降、石川県専門学校・石川県尋常中学校・第四高等中学校教員を歴任する。『詩選』の完成した翌年である明治十七年（一八八四）、加賀の藩政時代の蔵書を著録した目録『石川県勸業博物館書目』巻一を編輯している。明治三十六年（一九〇三）から大正五年（一九一六）まで広島高師で教鞭を執り、以後は東京に移り前田家の書籍を整理し『尊経閣文庫漢籍分類目録』（昭和八・九年）を編輯するなど漢学に詳しい人物であった。
- (24) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (25) 『詩集』は「添」に作る。
- (26) 『詩集』は「天子」に作る。
- (27) 『詩集』は「杜」に作る。
- (28) 天保七年（一八三六）の作。

- (29) 『詩鈔』は題名を「観高山彦九郎書有感」に、『詩集』は「読高山子伝有感」に作る。
- (30) 『詩鈔』は題名を「芙蓉峯」に、『詩集』は「題富山図」に作る。
- (31) 『詩集』は題名を「牡丹」に作る。
- (32) 『詩集』は題名を「辨天坂」に作る。
- (33) 天保十一年（一八四〇）の作。『詩集』は題名を「庚子正月十八日夕即時」に作る。
- (34) 『詩集』は題名を「芳野」に作る。
- (35) 『詩鈔』は題名を「富士山」に、『詩集』は題名を「富岳歌」に作る。
- (36) 『詩集』は題名を「探梅」に作る。
- (37) 『統詩鈔』は題名を「無題」に作る。
- (38) 『詩集』は題名を「題漁父図」に作る。
- (39) 『詩鈔』は題名を「京寓雜詩」に、『詩集』は「京都寓中作」に作る。
- (40) 『詩集』は題名を「偶成 用東坡題郭熙画詩韻」に作る。
- (41) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (42) 『詩集』は題名を「贈老僧妓阿勝」に作る。
- (43) 『詩集』は「偶作」に作る。
- (44) 『詩集』は題名を「北筑途上」に作る。
- (45) 『詩鈔』は題名を「答某先生」に、『詩集』は題名を「偶作」に作る。
- (46) 『統詩鈔』は題名を「客中漫成」に、『詩集』は「失題」に作る。
- (47) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (48) 『詩集』は題名を「即事」に作る。

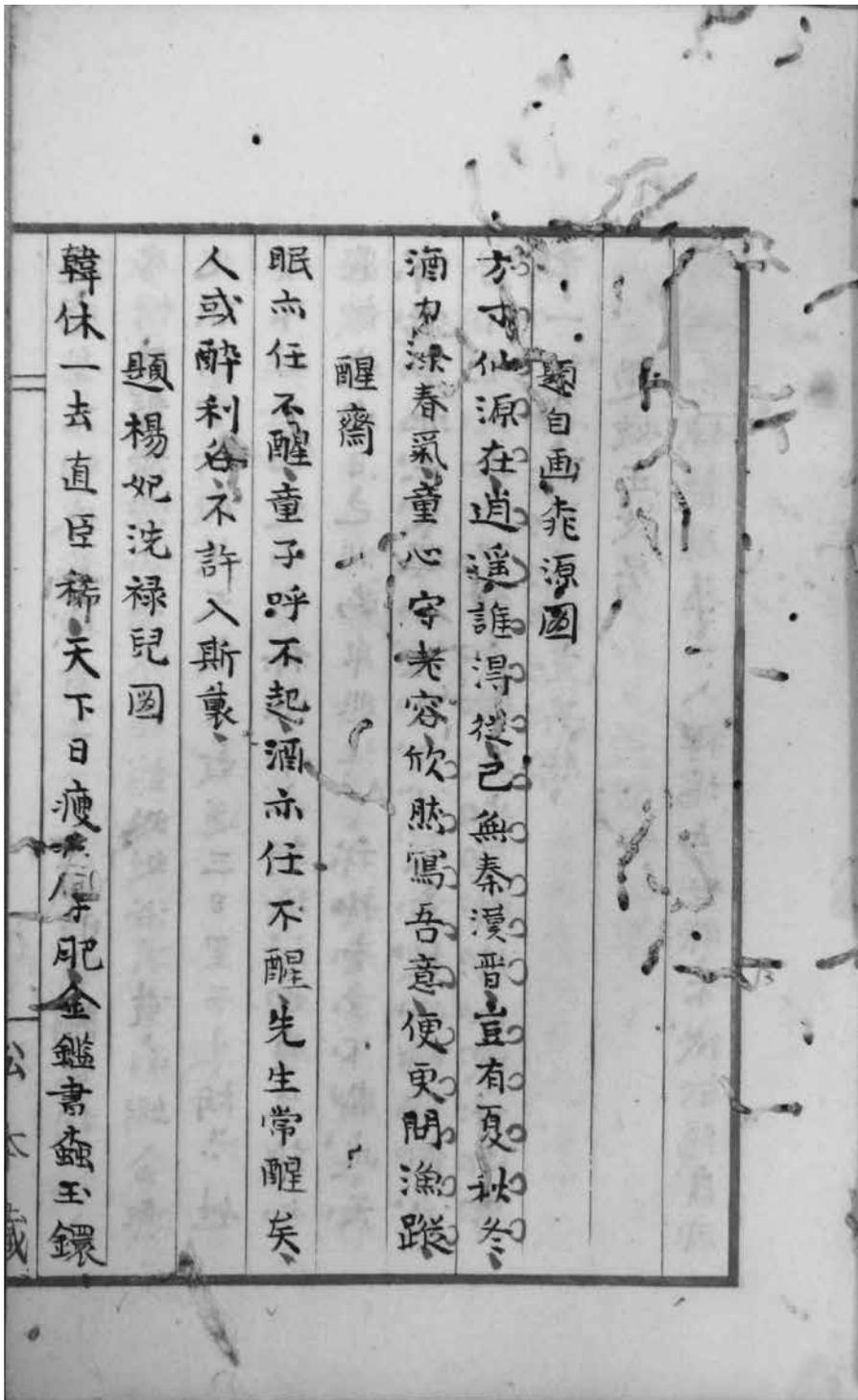
- (49) 『詩鈔』は題名を「蘭」に作る。
- (50) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (51) 『統五岳詩鈔』および『詩集』は、題名を「題画」に作る。
- (52) 『詩集』は題名を「即事」に作る。
- (53) 天保八年（一八三七）の作。
- (54) 『詩集』は題名を「漫興」に作る。
- (55) 徳永賢誠は大分の人、教導職試補として琉球布教に従事した。玉代勢法雲『真宗法難史』（布哇仏教会、昭和三年）および小栗憲一『琉球日記』（川邊雄大編『浄土真宗と近代日本—東アジア・布教・漢学—』（勉誠出版、平成二十八年）に収録）に名前が見える。
- (56) 『詩鈔』は題名を「戲贈売虫人」に、『詩集』は「即事」に作る。
- (57) 『詩鈔』は題名を「自嘲」に、『詩集』は「偶作」に作る。
- (58) 長三洲（一八三三—一八九五）は豊後の人、咸宜園の門下生で、維新後は文部大丞や侍講などをつとめた。『詩集』は題名を「別後有懐」に作る。
- (59) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (60) 『詩集』は題名を「偶作」に作る。
- (61) 『詩鈔』は題名を「題山水図」に、『詩集』は題名を「村居」に作る。
- (62) 『詩鈔』は題名を「某上人手造雪佛見贈因有此作」に、『統詩鈔』は「月菴上人手造雪佛一軀見贈因有此作」に作る。
- (63) 『詩鈔』は題名を「山中口占」に、『詩集』は「偶作」に作る。
- (64) 明治十三年（一八八〇）の作か。
- (65) 『詩集』は題名を「題自画漁父図」に作る。
- (66) 『詩集』は題名を「無題」に作る。

- (67) 『詩鈔』は題名を「題墨梅」に、『詩集』は「詠梅」に作る。
- (68) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (69) 『詩集』は題名を「嶺研嶺」に作る。
- (70) 『詩集』は題名を「憶友人」に作る。
- (71) 『詩集』は題名を「冬夜読書」に作る。
- (72) 『詩集』は題名を「題画」に作る。
- (73) 『詩集』は題名を「重陽前即事」に作る。
- (74) 天保七年（一八三六）の作。『詩集』は題名を「丙申歲暮感懷」に作る。
- (75) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (76) 柴秋邨（一八三〇〜一八七二）は阿波の人で、大坂の広瀬旭莊塾（大坂咸宜園）に入門し、のちに塾頭となり、のちに咸宜園で教鞭を執った。
- (77) 長南梁（一八一〇〜一八八五）は豊後の人で、長三洲の父であり、梅外と号した。咸宜園の門下生で、維新後は上京し、秋月橋門とともに漢詩結社・玉川吟社を結成した。『詩集』は題名を「偶成」に作る。
- (78) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (79) 『続詩鈔』は題名を「無題」に作る。
- (80) 『詩集』は題名を「題明智左馬介渡湖水図」に作る。
- (81) 『詩鈔』は題名を「秋郊散策」に、『詩集』は「秋晴散步」に作る。
- (82) 『詩鈔』は題名を「歲暮偶成」に、『詩集』は「失題」に作る。
- (83) 安政二年（一八五五）の作。
- (84) 『続詩鈔』は題名を「無題」に作る。
- (85) 『詩鈔』は題名を「失題」に、『詩集』は、題名を「無題」に作る。
- (86) 『詩鈔』は題名を「詠二河」に、『詩集』は「無題」に作る。
- (87) 『詩鈔』は題名を「偶作」に、『詩集』は「無題」に作る。
- (88) 『詩鈔』は題名を「偶作」に、『詩集』は「無題」に作る。
- (89) 『詩鈔』は題名を「賦喜」に、『詩集』は「無題」に作る。
- (90) 『詩集』は題名を「送友人」に作る。
- (91) 『詩鈔』は題名を「偶成」に作る。
- (92) 『詩鈔』は題名を「過田原坂」に作る。
- (93) 明治四年（一八七二）十一月十四日、日田県は廢止され、大分県に編入された。
- (94) 版籍奉還についてうたっていることから、己未（安政五年（一八五九））ではなく、己巳（明治二年（一八六九））の作と思われる。『詩集』は題名を「失題」に作る。
- (95) 『詩集』は題名を「漫成」に作る。
- (96) 『詩集』は「西郷隆盛」に作る。
- (97) 明治五年（一八七二）の作。広瀬青邨（一八一九〜一八八四）は豊前の人で、咸宜園に学び広瀬淡窓の養子となり教鞭を執る。維新後は上京し、東京華族学校教授となる。
- (98) 千原夕田（一八三〇〜一八九四）は豊後日田の人で、咸宜園に入門し、のちに長崎で木下逸雲に画を学んだ。『詩集』は題名を「送夕田東遊」に作る。
- (99) 『詩鈔』は題名を「時事有感」に、『詩集』は「偶作」に作る。
- (100) 『詩鈔』は題名を「時事有感」に、『詩集』は題名を「無題」に作る。
- (101) 『詩鈔』は題名を「山齋夜坐」に、『詩集』は「偶成」に作る。
- (102) 『詩鈔』は題名を「秋窓閑話」に、『詩集』は「遊岳林寺」に作る。
- (103) 『詩鈔』は題名を「時事有感」に、『詩集』は題名を「偶作」に作る。

- に作る。
- (104) 渡辺昇（一八三八～一九一三）のこと。肥前大村の藩士の家に生まれ、幕末期は討幕運動に参加し、維新後は弾正大忠をつとめた。『詩集』は題名を「東民渡辺君賜瓢及杖、副以高吟、賦此奉謝」に作る。
- (105) 『詩鈔』は題名を「新年詞」に、『詩集』は題名を「失題」に作る。
- (106) 『詩鈔』は題名を「書懷」に、『詩集』は「酔後吟」に作る。
- (107) 明治十二年（一八七九）の作。村上佛山は同年に歿している。
- (108) 「見真大師」とは、明治九年（一八七六）十一月二十八日、明治天皇より親鸞に下賜された大師号（諡号）で、明治十一年（一八七八）には勅額「見真」が下賜された。『詩鈔』は題名を「見真大師諡号会」に、『詩集』は「見真大師」に作る。
- (109) 明治九年（一八七六）の作。東本願寺上海別院は同年八月十二日に開院した。『詩鈔』は「支那本願寺別院開業式」に作る。
- (110) 明治十三年（一八八〇）の作。
- (111) 細川千巖（一八三四～一八九七）は、筑後・伯東寺に養子に入り、幕末維新期は破邪顕正につとめ、のちに鹿児島および琉球布教に尽力した。明治三十年（一八九七）に最高学階の講師を贈られた。
- (112) 香山院（樋口）龍温（一八〇〇～一八八五）は、会津の人。幕末維新期は破邪顕正につとめ、著作に『關邪護法策』などがある。
- (113) 五岳の代表的作品。明治十年（一八七七）の西南戦争をよんだもの。
- (114) 『詩鈔』は題名を「過田原坂」に作る。
- (115) 『詩集』は題名を「東肥田原途中」に作る。
- (116) 『詩集』は題名を「奉法主」に作る。
- (117) 『詩集』は題名を「大谷大法主過耶馬溪隨行有此作」に作る。
- (118) 『詩集』は題名を「偶作」に作る。
- (119) 『統詩鈔』は題名を「無題」に作る。
- (120) 『詩鈔』は題名を「觀西郷隆盛之墳墓函有此作」に作る。前述の通り、五岳は西南戦争直前に西郷隆盛と密会しており、五岳が住職をつとめた専念寺には五岳が描いた西郷の肖像画が所蔵される（現在、個人蔵）。
- (121) 明治十三年（一八八〇）の作。
- (122) 明治十五の作、慧燈大師とは同年、明治天皇より蓮如に下賜された諡号。『詩集』は題名を「慧燈大師」に作る。
- (123) 『詩集』は題名を「無題」に作る。
- 謝辞 本稿執筆にあたり、本誓寺前任職・故松本梶丸氏、常福寺前任職・北方匡氏、白山市立松任図書館、咸宜園教育研究センター・溝田直己氏には、資料の閲覧・撮影等に御高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。



写真① 「五岳道人 古竹邨舎詩鈔」表紙



写真② 「五岳道人 古竹邨舍詩鈔」一丁表